

真洲美乃鏡

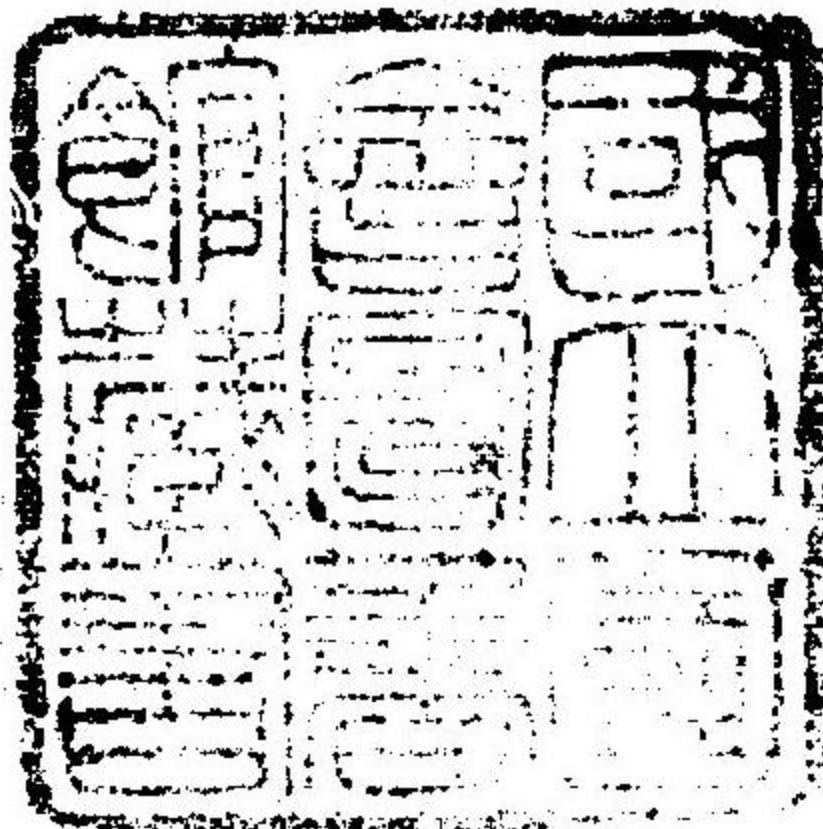
鍋島誠著

下

810.1

N14m

W



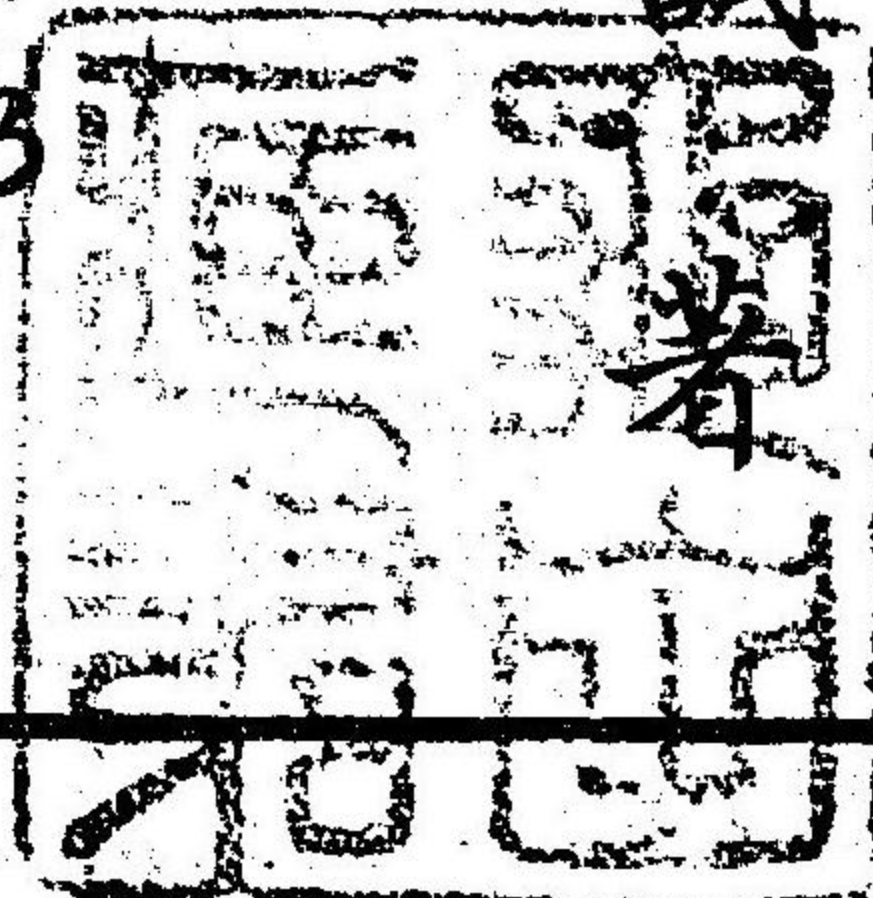
338089

真洲美乃鏡下は巻

鍋島

誠

中結は三種類例證詩  
顯結は部



顯結は部  
いで此結を中頃  
よりハさままぐよ  
用ひたれども古  
代ハ一種ハ用  
ひさほれみあり  
則かあまむき  
たらんれこあま  
よむのむら登  
辞ありわざとわ  
い同ト名れ上よ  
も詞ハ上よもそ  
ふらこいで我を  
いでかよひらね  
あどの如  
ゆくくと云くゆ  
くハゆくらく  
あどもひて心  
たゆらひて思  
づらふこあひ  
たー云ハ戀痛し  
あり○あをこま

いで ささひりぐまこ

みふれ川瀬ハ渡らむてゆくくとあ  
ひるし我を以てかよひらね○あを  
とをを人ぞさくあらいでさぎみ人  
ハ中こらたくとすあゆめ○以て我  
こは早くゆまこそ待ち山はつらむ  
いもをゆまこそらみむ○いでりか



あり○いさとを  
 きこせ云々あり  
 ずと告よありい  
 さや川までい  
 さといをむの序  
 分あり此体れう  
 二万葉集れらう  
 ハ甚多しいさと  
 いんをあらむと  
 いそむともあり  
 あむを中らうよ  
 りいさといん  
 バ必あらずとい  
 たり古代まハあ  
 きことあり人ハ  
 いさ云々より下  
 れうハ皆古今  
 集これらこれあ  
 り皆いさといひ  
 て下よあらずと  
 よみらうあり  
 かつ 思ひもよ

あらざとをりむむ○ふちせともい  
 さや白浪ならさるぐ我身ひらつハ  
 よらかともあし○りさやまむ戀て  
 ふらともあらあくよこちそあらら  
 むいこそ移られぬ  
 かつ  
 おもひよらぬよとやつく  
 こゝろ 後世此ハこれ  
 ちてかれは移る  
 をみあべーさ記さはふおのる花か  
 つみかりてもあらぬらひもまらか  
 も○つねハからつておもハぬもれを  
 此つきのきぎかくれはくをーきよ

らぬよとりつく  
 こらあり  
 大ら古代のハ  
 かつてとりへり  
 中頃よりハかつ  
 とせりへらうが  
 多し意もいさ  
 かつりり古代の  
 ハ漢土此嘗とい  
 ふハあさり中頃  
 より此ハ且れこ  
 こらよあさるこ  
 則これことを志  
 つかれことを  
 もするよ用あ  
 あり  
 をみあべー云々  
 花からみ云々は  
 てハからつてとい  
 らむ序あり○と  
 よめハあまひび  
 かつあり○日だ

ひあも○こあかくハからつてあう急  
 かわらぎすすきあたとよめてあひ  
 増ららむ○こあつみのおまよあひ  
 多らあはのすれ名ハからつてれら  
 あひハ志ぬとも○あめつちれ神を  
 も我ハりれさてまこひともあれハ  
 からつてやほぢけり  
 あに さあーあらそふらら  
 價あき寶とりふともひとつきれ濁  
 けら酒よあにまさらめや○よらひ  
 うる珠とりふとも酒れらそらら

つみれ云々あは  
たりれ云々は  
ハ。名ハといをむ  
序あり○からて  
やまづけり此け  
アハつねのけり  
と異ありずけり  
亦ぞけむあとも  
あり則やまざり  
けりれこころこ  
一種れ異さまあ  
るもれあり  
あに 豈れ字よ  
くあさけり先哲  
の説みあまハ  
のよれ紛言あり  
といつり甚志ひ  
ことありいあま  
と疑がへハ必ぬ  
けり。らむ。あどよ  
て結きるあり本  
居家のいも鏡中

をやるにあに志のめやも○やあ  
ゆく濱れまごどれ我らひよあにま  
さららどあおまつ鳴も○あにまあ  
らずあれがみれから人れこのこと  
もつくさどあねもよりあむ○あつ  
むーれひびどのこらもあむ入きて  
かくみやあまハあによくもあらず  
なに うあがひとあはるこころ  
かむ風れいせの園もあらほーを  
あにーのまけむきみもあらあくよ  
○みほくちを我らまきみもあらあ

れむすびあり此  
あにの結ハつ  
よ。ず。けり。あどよ  
てひも鏡右れむ  
まびありすべて  
延約ハとらみた  
らぬもれあり  
かくみやとらみ  
ハ多くれ人をか  
こみいづくこと  
あり則園抱跡人  
あり  
よくもあらずハ  
よろーからずこ  
あに こハ何の  
字よくあさけり  
かむ風ハいせと  
いあの冠詞あり  
則風ハ神れ御吹  
息よりあれる古  
典よあるよよれ  
るもれあり

くよあにーのまけむうほつからー  
み○よれあのをなにまたくむあ  
さびらきさたよー舟れあまきか  
ごこ○志づあまき數よもあらぬい  
れちもて何かもこころ吾らひ渡る  
○あにまとあつかひのまうつら君を  
こそかあもころもまちがくよま  
れ  
心や かき福て志きころころ  
あーべよりみちくよーれれりやほ  
ーよ思つら君が忘れらぬつら○人

あきびらきハ舟を朝早く湊をこぎいづるあり○こゝろハ前もいづる如く許多此こゝろあり○かにもかくも云々今いふとまもかくももあり則かハ彼こかく此あり○待かて云々ハ待難よて待のぬると同じあり  
いや のよくま  
まぐあり  
あしべより云々  
みちろる汐云々  
ほぞハいやまし  
といふ順序あり  
○やまとへ云々  
後世ハハ。とハ

毎よ折らさしつゝあそぶども以やめづらさきうり花ぞも○まみれ江れ里ゆきしハばはち花のりやめづらさきたみよあくるかも○秋風よやほらさしゆるかやのねいりやとねぢのを雲かされつゝ○くれあるれやハちのこほもあきあくるあらとハまねどらやめづらさし  
あな めでさあげくこころ  
波上ゆみゆるこころはのくもさうぐ  
アああまきつゝあひまのねねハ

338089

ふべき所は多くよを誤用せりよくせずハあやまるべし此と外結此條は詳くくくれあめハ紅藍花あり呉の国より持まゐさし故此名あり。からあゐどもよつり○やハ云々ハ弥入あり俗人いしくハ。一ハやハ。あどを一段つよき事はれといふハ甚あやまりあり深色は限ることあり  
あな あもあも  
感心より出る音  
聲あり

○アび人ハああこころあと思ふらむあきのなごよをりほぢハあれむ○たづがあきあしをさしてとびまこころあああつくハひりりさねれむ○ああよやハえをとこを○ああにやハえをとこを  
あほ まぐよまこころ  
ほそらをわかさしむとあげあどもまこれまをあほこひよけア○かくハあほやはからむちかゝらぬみちハあひまをあづみま

いきつかい云々  
 の歎息せらるる  
 といふころち  
 ○たうがあきま  
 飛渡る云々ほ  
 いたづらとい  
 ちむ序ありたづ  
 くし今りたど  
 くしよて心細ま  
 ことをいふあり  
 ○さぬれハハ  
 ハ漆音よて寐れ  
 があり○にや  
 えをとこをハ妍  
 哉美男子あり  
 あほ直れころ  
 を轉用したる  
 志とれ云々醜  
 ありありくハ  
 おと一たるあり  
 忌こき我あひ  
 もにつけられど

あきて○ひさかたあはぢい  
 一あほくよあくよありを  
 志はるる○あみあまの  
 とりみり鳥れうきねやま  
 やこぐた○もや人れせど  
 ほも鮎をしろよぬのた  
 志かずけ  
 多  
 大舟れおもひ多れみ  
 バ我ハこひあむ多だ  
 ○多だ一夜づて一から  
 まのつきかぬると思  
 ○もろ霞井の上ゆ多  
 れときみよあをむと  
 も○やはあれを多れ  
 むけせばけ多し  
 をむもの○物皆ハ新  
 人の舊るれみし  
 はた  
 みろーぬれ山の嵐乃  
 たやろよひもつが獨  
 ハつ海かくれこと思  
 多

醜れーと革  
 よありけり  
 の詩あり○  
 はからむ云々  
 へらむあり  
 るを俗人さ  
 きことよそ  
 ありいそあ  
 まれり罷の  
 ろよて退き  
 ること限る  
 ○あつみま  
 てハこーを  
 ましあり  
 りてあり○  
 をあまき  
 業をいすべ  
 とあり○を  
 ハ大隅薩摩  
 していあり  
 たど○あ  
 い似ります

まのつきかぬると思  
 ○もろ霞井の上ゆ多  
 れときみよあをむと  
 も○やはあれを多れ  
 むけせばけ多し  
 をむもの○物皆ハ新  
 人の舊るれみし  
 はた  
 みろーぬれ山の嵐乃  
 たやろよひもつが獨  
 ハつ海かくれこと思  
 多

よゆくあり  
 大舟此ハ思ひた  
 のむといをむ冠  
 詞あり○あらた  
 まハ荒木田氏の  
 説此ごとく新程  
 よて月日此新と  
 まりかまらあり。  
 たまハたまさか  
 あどのたまと同  
 じぬばたま。たま  
 きりる。あどのた  
 まも同トあり  
 ちも霞ハあとい  
 ふよかとも冠こ  
 たもとかり遠く  
 回り行あり  
 けだハハ氣ざ  
 此轉用よてさあ  
 らむうと思ふこ  
 はたハはことや  
 異ありことよ

せられずあほこひよけり○たこれ  
 き記されられしけよほとくきすすき  
 あきとよえハはこひめやも○や  
 ちくもつけらバあらむをさやく  
 ひなぎをとりと川よなるるあ○ほ  
 とくぎにをりこえきけバあぢたあ  
 くぬし定まらぬこひせらるるた  
 まるあ　あさびたちかへるころ  
 磐代此はまはつこのえをひきむをび  
 はさたてあらバはかへりみむ○  
 磐代のきしれまつがえ結びけむ人

りかこよは  
 うつろあり端此  
 轉用ありはハ  
 股の轉用ありよ  
 く辨ふべ  
 こはくの志げ木  
 之間繁あり  
 やそくハ瘦々こ  
 むなきハ鯨あり  
 うあきといハ  
 後世此訛あり  
 あちきあくハも  
 と味氣あく此轉  
 用あり  
 まさ　股此轉用  
 よて同ト夏をふ  
 たさびきころち  
 あり  
 まさたくハ全幸  
 あり  
 小まつろられハ  
 小松之末ありま

ハかへりてはみけむらも○はち  
 みむと君がむきづるりをりは小  
 松がうれをほみけむらも○こが  
 さかりいたくくたちぬ雲よとぶ薬  
 ちむともまをちめやも○むがせ  
 こよはハあをトあと思へばうけ  
 され別のまぶあかりつる  
 あや　あやしびめつるころち  
 ちバの野此このてかをはあは  
 れどあやよかあみおきくたがき  
 ぬ○さくなくぬみここよあれバか



つれうれハ。をを  
ふがうれれハ。をを  
つ由。あどもハ  
りみふ末れこら  
あり今うらとい  
ふハこれあり  
マがさかりい  
くくごちぬハ我  
盛甚衰うらとこ  
よくたち。あども  
いふ。さかりくご  
らあり  
雲よとふ薬を仙  
人の丹あり  
はむハ食あり  
をちハもとよ立  
かへるあり。ハや  
とち。をちかへり  
あけあどもいへ  
り。おちと混ふべ  
ららず  
あやハ感歎此声

あり則あアヤと  
感發さるあり亦  
あふ。あをれ。ども  
又感歎此声あり  
を。まれとハ含  
ありたれとこ  
かありみ可愛こ  
悲れくくろよも  
用ふれどとと  
ハ異あり  
さへあへぬハ塞  
かたたといふの  
東国訛ありこ  
此かありもハ悲  
れこくろありか  
みれとハやハ異  
あり  
こ。ハ此辞古事  
記此内ハあるこ  
是ハもあり  
かけまくもハこ  
とをみかけむも

あーハもがたまくら離きあやよか  
なも○あもあやよかーこー○  
かけまぐもゆーしきこのもハをほく  
もあやよかーこた○そをしもあ  
やよかなーみぬえ鳥ハ○此みまハ  
あやよろたぬーさ  
つひ おーてとねにこくろ  
たまくらーげみむらハ山のさあかつ  
らさぬむハつひよあまがてほーも  
○ゆけるひとつひよも志ぬる物あ  
れハ此世あるはハ樂ーくをあらな

○我故よりこくあハハそれちつひ  
よあまーとハハハこもあらあ  
に○つひよゆく道とハかぬてま  
ーかどきのふけふとハあまをざり  
ーを○あげき餘りつひよ色よぞ出  
ぬづきハあぬを人のあらハこそあ  
らる  
ほづ まみりつらこくろ  
ちるさればまがらあくとりハ鶯のこ  
とさたづちーまみをーまむ○ほ  
らまぎハかひとほせらづこくろ

あり  
そこをしもあり  
此二辞ハ長評此  
内あり  
これみきのあや  
ようたぐぬーさ  
ハ此酒此妙よ  
宴樂ハ柏子此詞  
あり  
つひハ終此字よ  
く當れりけちく  
みハとつもんが  
如し  
たまくーけきさ  
あがつらさねと  
いむ序ありさ  
ぬハ寝あり  
ありがてほしも  
ハありがさから  
むとしふが如し

つひみゆく云く  
此詞業平の末期  
此評あり實情を  
よくつひつくせ  
り不凡此口がり  
あり  
はづハ先此字よ  
く當れりさたが  
けてつづらこ  
かひとかせらバ  
ハ飼えさうバシ  
さむかふハ來向  
ふあり  
けにハ異よあり  
別段よといえん  
が如し此評古今  
集此あり此詞万  
葉集此よ多し  
つひみあれやも  
つひみけよあ  
あどつづり  
ちろされバ云

てきむうふ夏ハはづあきなむを○  
まされあむと思ふ心はつくからよ  
ありーよさけよはづそらひーき○  
ちろされバ野べよはづさくみれと  
あゆぬちあまひあーよ多く名れる  
べき花の名あれや○秋くれバ思ふ  
心ぞみづれつはづもみぢバと散  
はづりける  
さら あらためて立かへるころ  
ついでいあむ時ハあらむをささ  
らよつまらひーつあちてりぬべ

ーや○しまささらよあよを思ふむ  
たらあびきころりいきみよよゆよ  
ーもれを○心ゆもあそもいさ  
まささらよ我らささよかへりこ  
むとハ○しまささらよもよ遇めや  
と思へかもさあ我むはあ  
からむ○あをれれてまよささ  
る此つよ亦さらよーと雲あなを  
びき  
うべ うべあひあさかみころ  
皆人けらろみよーぬけふみきバ



かあるがためと  
いふが如しさゆ  
るは活轉あり  
よくだちハ夜更  
あり  
我さかりいづく  
くらちぬの條よ  
もいづり  
志ぬびハむか  
をおもふあり忍  
乃義はあらば  
此とのハ云くさ  
まくさハ云くみ  
つバといをむ序  
あり  
いな 否は義こ  
すがははハ乱る  
ハ冠辞あり  
いありこめ云く  
古事記神代記の  
中神いざあきハ  
神ハ御ことハ

ありよみハ国よ  
りかへりたまひ  
ての御辞あり  
志こめぎハ醜め  
きありかきこて  
いふハ則上ハい  
ありこめとほく  
みておりまハた  
るあり下ハ志こ  
めきハきたあき  
よみの国とハみ  
あり  
此外の顯結もこ  
れよあをらへて  
志るべきあり  
こそハ評論ハ助  
辞ありこれそれ  
の二ツをかきま  
るれとおもハる  
あり  
木ハあがくり  
云くがくりハ隠

そはさめ御思ひよりハ○きのふこ  
そきみハありハ思ちぬよをほよ  
つれ上のくもよたあびく○むの  
こそよそよもみハ我もこがあく  
つきと思へばはハきさほ山○こひ  
ハあむれちハあにせむひける日ハ  
ためこそ妹をみまくほりきれ○心  
よハ忘るハ日あく思へども人ハ言  
こそ繁きたみあれ  
さへ こそかさぬるころり  
天くもれよそよみハよりいさきまこ

が心も身さくハよりよハれを○人  
免たみあをさるハみぞ心さへハ  
を忘れてハ思ハあくよ○ぬを多  
まれよべハかハハつらよひさハ我  
をかへまお路ハあがてを○橋ハみ  
さハ花さハハ葉さハ枝ハ霜ふれ  
どハやとハ葉の木○をとらハひも昨  
日も今日もみつれども明日さハみ  
ほく愁ハきたみハも  
だに ひとまらとりそハころり  
み白山を志ハもかくまら雲ハにも

りあり古代ハ大  
かゝいくりとい  
ふあり  
きのふこそ云々  
此詩ハ哀悼ハあ  
り火葬ハ烟をみ  
てよめらあり  
おくつきハ墓所  
あり則奥ハ城の  
くちあり  
はーまハ愛べき  
をいふあり  
うるハーまのハ  
ーま又くハーま  
此ハーまハと  
同ト出所の語あ  
り  
さへ 万葉集ハ  
副の字を當より  
これのあるがう  
へよかれをもそ  
ふるあり

心あらあむかくさふべーや○明日  
香川明日あふみむと思へやも我大  
きみのみな忘れせぬ○ゆふだくみ  
てよとり持てかくぶよも我ハこひ  
あむきみふあハーま○りつーあ  
と待らむいもよ玉づされこゝろよ  
告ぎいよーまみあも○洋山もつご  
たらあふよ何ーのもめこをぶよ  
もこゝろもーま  
ほで かーこへうつるらら  
大みやれうちまできこゆあびまを

ぬバハまハ上よ  
もりつる如く寝  
間程あり夜とい  
るむ冠辞ありそ  
れより轉じてや  
みくら。まもかく  
るあり  
みちれあがてハ  
道ハ長てあり此  
てハ山れて渡り  
であじれ。と  
し。君が行みちれ  
あがてをくりた  
ゝ祓やきあるお  
さむあをの火も  
がも。といふ哥も  
あり  
をとつひハをち  
つひまで一昨日  
あり今をとつひ  
と轉訛せり  
だにハ一ことを

とあごととせはふるあまれよひ聲○  
みくろゝ志く島をも家とすむ鳥も荒  
びあゆきそ年かろほで○東はい  
ちのう志木れらだおまぞありむ久  
しみるべらひみけを○くら髪よ白  
髪まどを老るまぞかろ戀よハ以  
まぶあをなくよ○ぬをたまれ其夜  
れつらよけあまぞ我ハ忘れま  
わくー思ハバ  
から ぬはよ志がひそふこら  
路よあひて志ほくからよ零雪れ

真州集 卷之七 十二

とりて異方よろ  
つらぬあり  
あらあむハあれ  
かーと願ふあり  
ありあむと迥  
異あり則

あらあむ

れろ 此あむ  
りあむめと活  
あり

我ハらひあむハ  
戀あむよハあら  
ず神よを祈  
玉づされ説くさ  
種あれどいまど  
正しきもあーあ  
不考てひ  
めことハめハ顔  
みるありことハ  
言詞をかきす  
までハかあこほ

けあバあぬがよらあらふひきも○  
唯ひらよふごてーからハあらたま  
はつきうへぬると思わゆるもの○  
戀くさを力車よ七車つみて戀らく  
アガ心から○古きとハ速くもあら  
ず一ハ山登つてーからハ思ひぞ  
がせー○語つぐからハあつハ戀  
しきをあひめよみけむ古をとどの  
み ひるすらきるころ  
かくれハみよありける物をなきが花  
き記てありやと問しきみハも○か

さす所あつよ  
ころ助詞あり左  
右ハ手をほでと  
いふより轉ド  
ろあらむ  
あびきすとあど  
とハあつハ網  
ひき為と網子を  
よひてころあ  
あり  
こだらハ木ハ丈  
高ハあれ  
市ハう志木ハ市  
ハ頭ハ概り亦ハ  
橋あどをうあお  
くあり  
からハゆゑとハ  
同ハ古の記典  
よ故ハ字をかれ  
とよむももと同  
ト出所あり  
けぬかにハ消ぬ

くられハよありけるもれをいも  
れもちとせのごとくもあれきたりけ  
れ○あひみぞハらひさらまーを  
もをみてもとあかくけハみらひハ  
のよせむ○あひよあひてみてハ  
みこそたまたちる命よむかふアガ  
らひやほめ○ことけハをのちもあ  
らむと福もごろよれをたれをて  
逢ざらめうも  
すら ころくらぶるころ  
輕ハ池のうらまめぐれる鴨をら

るむりといひ  
 ま似たり此詞万  
 葉集中多し  
 らふといふハ  
 といふあり後世  
 此らふてふも同  
 じ  
 あらま前よ  
 へり  
 語つぐハ語り継  
 みていひ傳ある  
 あり此詞ハ下総  
 の国からしうけ  
 ばくけてこおハ  
 古事をよめるこ  
 此事万葉集よ  
 める詞四五首も  
 あり  
 けみハ其物をひ  
 たすら祈かふこ  
 ころは用ひたり  
 祈るをけむとい

たまもれ上よひり寝あぐよ○こ  
 とらぬ木をらゝいもとせありとふ  
 を唯ひりりこよあるがらるーさ○  
 たらちね母が園ある草すらも願  
 へばきぬまたるどふれを○いと  
 まあみさつきをまらよひきもこが  
 花橋をみぢよすぎあむ○大空ゆか  
 よふ我をら汝が故よ天の川ちをあ  
 づこてそ来ー  
 ゆゑ  
 ごとくりよまあまらるころら  
 大舟はつねとまりけ多ゆへひよ

ふ詞ももと同ド  
 出所あり  
 はもハ歎息ハ助  
 字あり俗ハツイ  
 マアといふは當  
 るあり  
 もとあハさある  
 まどきよありき  
 ころあり則本無  
 の意より出たり  
 此詞集中多し  
 古今集已後ハ  
 をさくみえず  
 あまたハるハ程  
 來經ありあり  
 まぬバたまのた  
 まよ同ド  
 ことけみハ口よ  
 けこあり  
 終もくろハ今け  
 ぬむぐらあり  
 あれめハこのま

物思やせぬ人け見ゆゑよ○ひさか  
 けあゑーらーぬらきみゆゑよ月  
 日もあらよらひりらるも○かく  
 故よみドといふれをさーなみの  
 古きみやこをみせつーもとあ○ま  
 たらみれてよまたわらる珠故よい  
 それうらほよかづきするらも○此  
 をあよを志のふとおこ志らかねら  
 ひらもかもすらくきみゆゑよこそ  
 ごと ひらーくなららるらる  
 じぎもこが裁ー梅け木みらごとよ

しむるもて力よ  
思ハするあり  
すらハ物と物と  
を比例する助辞  
あり  
輕此池のうらほ  
云うらうら海邊  
は限らず池よも  
いふべし古代ハ  
池をもうみとい  
へるもあふあり  
うみれみハ水あ  
り  
たらちのハ足乳  
根あり足の児を  
ひくらしおわを  
あり根ハおやの  
くろあり神此  
御名に根とく  
へはつるが多し  
祖此くろあり  
ゆゑハ故の字大

心むせつゝ涙し流る○さほ山よた  
あびくかきみうるごとよいもを思  
出てたのぬ日ハあし○湍を早之落  
たぎちうる白浪よかきづ鳴ありあ  
さよひごとよ○夕だち此雨ふるご  
とよかきづぬれををあが上れ白露  
思わゆ○やまとよハ鳴てかくらむ  
郭公あが鳴ごとよたきひと思ほゆ  
ため　ほりけあきこころ  
忘ぐさ我ひもよつくかぐ山れ舊よ  
し里を忘れぬがあめ○風高くへあ

かてあたれり  
あゆとひハ猶豫  
不定の義あり  
やせぬハ瘦ぬこ  
まらにハ老らぞ  
とちハ同トいさ  
ハ異あるハ上  
にをといふ音あ  
るあり則月日を  
去らに亦月日も  
あらに此ごとく  
必もつをわあふ  
あり  
もとお上よとく  
かつきハ頭突に  
て水底にく、ま  
入あり  
うかねらひハ窺  
規なりうかか  
のがふハ活語こ  
ごとハ更のこ  
ろあり轉しとる

ハ吹れと妹がため袖さくぬれてか  
ける玉もぞ○龍れはも今も得てし  
が青よよしなられみやこよ行てあ  
むたれ○龍れまを我ハ覓む青よよ  
しなられみやこにこむ人れあめ○  
うらひまれ待かてよせし梅が花ち  
らぞありこそ思ふこがあめ  
つゝ　ひきつゝくろこころ  
かくをあり戀つゝあらずハ高山れ  
磐石しまりて死なほしもれを○ほ  
そ鏡みあかぬ君よおくれや朝也



なり毎の字よく  
あされり二種あ  
り則名より  
山ごと小野ごと  
に  
此とき何れの  
山もにて山く野  
くあり  
詞あり  
さういときくご  
と此ときいつ  
のときみてもい  
つれとたきく  
もにて俗のころ  
タビきくタビあり  
あめり今此俗語  
と同トあり  
忘れぬがため  
忘まひぬるため  
よあり  
へたのきくべあ  
りくごふへとの

ふべふまびつをらむ○さよ中よ  
友よぶちどり物もふとまびつを  
るふなきつてもとあ○よそおめて  
戀つあらざハ君が家ハ池子住と  
ふ鴨ならまを○遠からバまびて  
もあらむを里近く有と聞つみぬ  
がすべあさ  
むる ちならふころ  
をれ上よ零置る雪ー風のむるあ  
まちららー春よあれども○妹よこ  
ひひぬぬ朝よ吹風ー妹よ觸なバ我

えもつふあり  
たつのまの龍馬  
あり  
青にょーの奈良  
の冠辞あり諸説  
ありて一定せず  
久老此説よろし  
きに似たりうら  
集中にかゝらむ  
とかひてありせ  
ばあをふよーく  
ぬちことくみせ  
まーものをとい  
へる筑紫にて  
の哥あり此あを  
にょーのああに  
やーといふとも  
と同一詞ありと  
説り  
ありころのあれ  
といふに同トく  
今まこと

むるよふれぬ○國遠き思あひひそ  
風ハむる雲ハ行ご言ハかよハむ  
○風乃むるよせくる浪よひさるを  
るあはをとららむハ裾ぬれぬ○  
つ老嶋ハせごの月このめハ人ハむた  
荒かりーうど我むハ若免  
よア 二方を一つよきころ  
ひもみのや高つハ山の木ハはより  
我ふる袖を妹見つらむ○今より  
ハ秋風さむく吹あむをハかでの獨  
ながのき夜を秘む○今よりハ紀ハ山

つゝの同トこと  
をニとびひふま  
り則こひつゝの  
こひつゝあり  
かくばありま  
らぞい集集中に  
此詩の跡甚多  
かふべありこひ  
つゝあらむより  
いのこゝろこ  
もとあよひい  
り  
よそにゐてま  
にいへる口調あ  
り  
むたゝ共の義あ  
り此物辞古今集  
已来のにいをさ  
くみあゝらす則  
とともへのこ  
ろあり  
長詞にも上略と

まもおきつゝも朝  
羽振風こころよせ  
め夕はふる浪こ  
そたよれあみの  
むとかがりかく  
より玉もあそよ  
りねいゆもを  
あともあり  
いさりの海にて  
魚をもとむるな  
りあさりの陸に  
て食をもとむる  
あり則ひみえ  
ぬものあみゆ  
るも此のこゝろ  
あり此ことい  
たまはつゝへに  
詳か説べ  
よまの従の字か  
あへりよりあふ  
寄の義より轉  
とるこをて助

路ハさびしけむるあかよハむと思  
ひーもれを○遠つ人松浦さよ姫つ  
まごひふひれふりーよりおへる山  
の名○かまがぬふ時雨ふるみゆあ  
まよりハ丹葉かぎくむ高圓此山

幽結乃部證詞

べー うべなひ思ふこころ  
梅此花折てかぎせる衆人ハけふれ  
あひふハ樂しくあるべー○雲ハ飛  
ぶ薬をむとハみやと觀ハひやーき  
何が身亦をもちぬべー○かゝーつ

有なくさめて玉此緒乃断て別きバ  
まくなかるべー○風吹て海ハある  
ともあまといをバ久ーかるべーき  
みおほよく○海川路此なきあひ時  
も渡らあむ此立濤ハ舟出まべーや  
めと おもひまハむるこころ  
をささをとをささずけをと沙舟此  
ならべてみればをささからめり○  
立田川丹葉乱て流るめり渡らバに  
ーき中やたえなむ○むつ言も未ど  
盡あくよ明ぬるりつらハ秋此長

辞の轉活の起源  
 をさぐるれば其こ  
 ころさとりつづ  
 しいに此やあふ  
 このやこれら此  
 やの軽くうへと  
 るにて疑ひのこ  
 であらふ  
 遠つ人の待とか  
 かる冠辞あり此  
 詩さよ姫の古更  
 をよめるあり俗  
 説にさあひめが  
 石にあれるとい  
 ふの大なるひ  
 がことありこれ  
 から國の望夫石  
 の事を思ひよせ  
 たるあり  
 幽結の詞の活き  
 に似てうつるあ

してふよハ○飛鳥川淵せよ變る心  
 とハ皆上下の人もつふあり○みや  
 こ人ぬて待らめや郭公今ぞ山べを  
 なきてつづめる  
 けり ありはまゝなるころろ  
 ころおして家やもつづく白雲れた  
 な引山を越てきたにけり○ふどは  
 零おける雪ハみな月は望みけぬ  
 れバ其夜ありけり○人もなき空  
 き家ハ草はくら旅よまさりて苦  
 かりけり○ぬを多まは黒髪白く變

り則べい。べき。ッ  
 々れこれ外言の  
 活きか同ドめり  
 める。めれ。こま内  
 言の活きに同ド  
 ぬぬる。ぬれ。こま  
 二言此活きに同  
 ド  
 べー。ら。べの轉  
 あり可。須。當。宜。お  
 とにあされり  
 雲にとぶ薬のむ  
 よの食よりへこ  
 をちの前記説り  
 ぶだの和にて海  
 の浪はくぬこ  
 めりのむの一轉  
 せるにて然らむ  
 と思ふあり  
 をくさの地名あ  
 りをくさを其  
 所の丁男ありを

りてもつづきらひふハあふ時あり  
 けり○藤をみは花ハ盛よなりみけ  
 ありはみやこを思むや君  
 らむ うゑがひおもふころろ  
 やはみ〜吾大王は御舟待りこ  
 くらむ志がはから崎○松浦川々は  
 せ湍み紅色の裳は裾濡て鮎り釣ら  
 む○志はらくも行てみてーが神あ  
 びは淵ハ浅びてせよのふるらむ○  
 あさりすと磯よ我みーなれりそを  
 つづれの鳴はあまの枯らむ○汐早

くさきけをい助  
 丁男あり  
 いづらにいづれ  
 とわく似ていつ  
 くといふに類す  
 則土佐日記ふあ  
 るものと思ひつ  
 なほあき人をい  
 つらとどふろい  
 あらかりたる。亦  
 古今集にも玉た  
 れのを龜やいづ  
 らこあろきの浪  
 かきこけて沖に  
 出なむふともあり  
 皆上下の水上下  
 をあやにいひか  
 けとるあり  
 けりい来の轉こ  
 ふ。此ふふふ  
 の山雪ハ六月十  
 五日に消をとり

み磯まよをればかづきさるあまと  
 やみらむ旅人我を  
 けむ　むろーをうたづかろろ  
 大なむちまぐあ彦名れ在ーけむ志  
 づれつをやハひくよへぬらむ○か  
 つーのれまゝ乃入江ハ打靡く玉藻  
 かりけむてああー思わゆ○古ふあ  
 りけむ人も我如く妹も戀つゝみ孫  
 がてよけむ○なごのくよもたもあら  
 まーを何をとあひみ初けむいげ  
 ざらなくふ○みよーぬれ青祿が峰

やがて其夜にふ  
 ると古昔よまれ  
 かろりつたへあ  
 るべーいまもい  
 ふあり  
 草まくらハ旅の  
 冠辞もあひ人の  
 草を枕みすとい  
 ふこころあり  
 けきこひの戀  
 ゆえ苦痛をるこ  
 らむハ今俗れや  
 らむあらむと同  
 ーもといあらむ  
 より出さるあら  
 む  
 やまみまゝ安見  
 知とにて　天皇  
 天下をやすらう  
 にミて去らーめ  
 をといふこころ  
 あり

此苔筵誰の織けむ經緯なーふ  
 ず　あへてせざるこころ  
 ままれあまの塩焼ぎぬれあぢ衣ま  
 どわろーあれバハまごまをれず○  
 眉れ如雲るよみゆたあハれ山かけ  
 て榜舟泊りまらずも○さく花の色  
 ハかそららず百志まきの大宮人ぞ立か  
 らりぬる○豊國の鏡ハ山乃磐門た  
 て隠ふけらーまでどたまさぐ○た  
 またハ命ハあらむ松枝を結ぶ心  
 ハ永くとぞ思ふ

去まらくハ今の  
志ばらくと同じ  
息間ありハ轉  
あさりの前よ  
へり此詩戀をた  
とてよめるこ  
あのりろハ女に  
たとへたるあり  
けむハ来らむの  
轉あるべし過去  
此疑ひあり  
てこあハ前にい  
へり  
ゆもあらま  
ハ黙してあらま  
ハをあり  
とけざらあハ  
すをとげさる  
にあり  
たてぬきハ  
のたを糸よこ糸  
あり直にたつる

ぬ せりせしめらるる  
あ免地と共よをくむと思ひつ事  
へはつりりこころ多かへぬ○泣澤  
此杜よみりき急祈れども吾大きみ  
ハ高日あらハぬ○天皇ハ神よしま  
せバ天雲此ハわへ此内ハ隠り多ま  
ひぬ○古昔の事ハ志らぬを我みて  
も久くありぬ天此かぐ山○山高  
み夕日かくりぬあさぢ原後みむ  
免ふ志めゆハはしを  
つ まぐふをく多らるる

故に多てといひ  
横ふつらぬハ故  
にぬきといふこ  
ずハ不の字よく  
あされり  
ふぢころもハ鹿  
衣にて賤者の服  
あり藤にており  
ころあり後世ふ  
ぢころもを後の  
服とす古代のと  
ハ異なり  
まとわハ目遠に  
て藤衣のあらき  
をいふありそれ  
を間遠にいひか  
けり  
まゆの如ハ細く  
眉の如クミゆる  
速島此形象あり  
も、ハきハ百石  
城の義にて大宮

よき人のよしとくみてよしとハ  
ひしよハぬくみよを紀人よくみ  
つ○さく浪の志が此幸崎さ記くあ  
れど大みや人ハ船まちか祓つ○我  
もこふるなぬハみせつなとき山つ  
此松原ハつあ示さむ○山守ハあ  
まけらあらよ其山よ志めゆハ立て  
ゆハ此恥しつ○劔大刀身よとハそ  
ふとハ志みみつ何此さかぞも君ハ  
逢む多め  
はし 祓ぐハおもふらるる

をさすあり  
 豊國ハ今の豊前  
 豊後をさしての  
 ふあり  
 ぬハ逝の轉あり  
 ともにをへむハ  
 共に竟むにいと  
 もふあらむとい  
 ふごと  
 泣澤のもてハ命  
 びハ此神あり此  
 神ハ更古典にあ  
 りハざあぎの神  
 此御泪にありま  
 せる神あり  
 高日志らハぬハ  
 天皇神あかりま  
 して天つ日の御  
 國を志ろハめす  
 とあり佛家ハ天  
 に生るといふと  
 ハ異あり

かゝらむとかねてしりせば大御舟  
 はてし泊ふ志めゆハはしを○明日  
 香川志がらみ渡しせあはせバ流る  
 水もれどぬのあらまし○思ふふ  
 死する物よし何らはせバち度ぞ  
 我ハ志よかへらまし○あらかどめ  
 きみ起まさむと志らませバやどみ  
 かどよも玉志のましを○きみお家  
 花橘ハありみけア花ある時よあ  
 ハましを  
 あへてえせぬころ

志めハのち此志  
 るハに結ぶ標的  
 あり  
 ついでぬといふ  
 がとよき人の  
 志此うハあ  
 ぬといふによ  
 てよ  
 さきくあれどハ  
 つかもあくあ  
 れとあり  
 我もこハ女を  
 のて旅ゆくと  
 およめるこ  
 示さむハさし示  
 してみせむあり  
 山もての志此う  
 たい主ある女と  
 志らるにハひよ  
 りて耻をみさる  
 たとハあり  
 さがぞも前兆よ

百とせれ老舌いぞよむむも我  
 をいハハドこひをほきとも○若け  
 れバ路ゆき志らハまひハせむ志  
 へれつあひおひてとあらせ○ま  
 此底志がく白玉風吹て海ハあると  
 もとらずハやまし○みなあちれ布  
 そ川山よ多らまゆみゆづうはくま  
 で人よ志らえし○あむとあふもこ  
 ぬ時何るをこしといふをさむとハ  
 待ハあしとあふれを  
 なむ 志のれと福がふころ

やありあると  
いとむが如  
まゝと結ふ詩大  
かの上。せば。あ  
だ。あどいふ。は。此。  
て。ま。は。あり。さ。あ  
き。も。ま。れ。み。あ  
れ。ど  
あ。ら。か。か。め。か  
ひ。て。と。い。ふ。み。似  
たり。豫。此。字。あ  
れ。り  
ト。と。む。と。い。え。る  
か。小。異。あり。ト。い  
俗。の。マイ。ど。ハ。俗  
の。ナイ。お。當。る  
よ。む。の。老。て。舌  
の。ま。い。ら。ぬ。人。の  
こと。ば。と。と。こ。わ  
る。あり  
ま。る。け。れ。ば。此。う  
と。小。兒。の。死。と。る

み日山を志らも隠すの雲たおも心  
あらあむかくさふべーや○我妹子  
はくーろめあらあむはくまでの我  
おくけてよまたてひなまーを○も  
たも何らむ時もあのをむひくら  
は物もふ時よなきつもとな○我  
妹子はきぬふあらあむ秋風此寒き  
此らろ志らよきはーを○まとさけ  
バおたゆさあむみなとよりへつ  
かふとまよさくべきまはる  
まきさうりたるころろ

をあげくあり  
まひのまひあひ  
あり  
まゝへ北つひ  
ひよみのくくの  
催命使あり  
おひてとやらせ  
ハ背おおひて通  
行せよあり  
あつくハ下附お  
て底に沈むあり  
ゆつうハ弓のつ  
うあり此詩女お  
ひろうお契りお  
きて我妻よせむ  
までハ世の人に  
あられトとのた  
とんあり  
あむハ所謂願希  
のおむなり則未  
言よりうくるあ  
り

人ごとを繁ところたみあはさうりき  
心あら如あおもひ日がせ○よひよ  
あひてあーあおもなみあバまぬれ  
萩ハちりよき丹葉をやつげ○あち  
をられ奮るし里れ秋萩ハさたてち  
まよきたと待か秘て○うつてあも  
ひるも我ハもさざりきふりある  
きみよらふあをむとハ○我妹子  
お戀てまぐなみ白多くれ袖うへ  
ハハひるふみえきや  
なむ やみひめおころ

有あつむ願ニツの別うこれこれ去去 ありまむ バ  
くしろい古代手の節ままたまころもれあり今も漢画の婦人あとの手節ふい画くかりの如し

おくのてハ左の手をいふ之おくのて比ゆみとる方といへる詩もあり  
もたハ黙の字れこころあり  
ことさけバハとてもかくてもさけむとあらバの意あり  
きハけりの一段つよきあり

こちたみハ言痛おて甚くいふあり  
よひよきおもあまゆてハあり  
といハむ序ありあがりハ隠の意なりおしてるおにハのをえハいを造りありりてをるあハ蟹をきといへる詩もあり  
おまるともいふあり則女のよひハ初めて男に逢てあくろあしハ顔らろハダ恥りハさハ隠ろくハいハひかけあり  
あむハ去のぬるくろく則所謂

なまなくよ人とあらざハさかつがふありみてしも酒おしみあむももつあふいをれの池よあく鴨をけふれをみてや雲かくりなむもあぎもこがやどハ籬をみふゆのバけあしかどよりかへしあむもすみれえのこはまハ蜆あけもみんもそのみやもこひ渡りあむもありそこを浪をかこみあハち嶋みぞやまきあむもあちかきをてむ かまてさだむるころ

あふあをがあひもかまてむいハかそよ雲たちりれみつたあぬバむも一端ハ千度さりらひ逝水ハ後もあひてむ今あらざとももうめハ花まるさく枝をたをりてハつとあづけてよそへてむももつらだち身おはまそあらますらをやろひちふハれを志ハびかまてむもかくあもも我ハこひあむたまがらさハきみがつかひをまちやかねてむらいあのバをうあのふころ



過去のふむあり  
かりくいかかり  
てとのふおち  
似たり  
もつとふハ百  
数不傳ふおて五  
十とかくる冠辞  
あり  
けだハ蓋とか  
く漢語よくあ  
れう氣出しの轉  
あり此語漢籍渡  
来後のものある  
べし此類多くあ  
りけあしすあ  
ちいふらむ。あ  
かじめすこぶる。  
あふがち。などち  
りこれら漢籍を  
譯讀するより出  
るとあるべし  
てむつてといふ

ておまにむをう  
へと一ツのむ  
まびあり  
さいらひハさ  
りあひここれを  
さうり此延語お  
りといふハ皆例  
のひがごとあり  
まじふべくらを  
しぬひまニくさ  
あり一くさハ内  
言一くさハ二言  
あり内言のい  
まハへをこひお  
もふあり二言ハ  
ハ物をこらえあ  
のふあり混ふべ  
うらむ則ちぬハ  
むハ内言まぬハ  
しぬおるハ二言  
らハむとつと  
く異あり必一ツ

もるまぎて夏まゐるら  
白たぐれ  
衣布しり天れかく山  
○ますらを  
此鞆の音をありもれ  
ふの大はく  
つきみ楯たうら  
○志まら山打  
くえられバ我のれら馬ぞ爪衝  
く  
こふら  
○梅の花今盛あり百  
たの聲れこわ  
らまゐるら  
○あま少女珠求むら  
沖つ浪か  
らき海は船出せりみゆ  
む  
むまびさおむら  
はらくよ人をあひみそ  
のならむ

つづれの日ああ亦よそふみむ  
○あ  
めよまはつきよみをとこまひハせ  
むこよひれあがさ  
つわよつたこそ  
○みくふ山あぬれよままふむ  
びハ鳥まらうが  
をまちやせむ  
○我せそふら  
れバくろ  
あらバ拾ひてゆるむ  
らひ忘れあひ  
○あめハあちかりわハつら  
つ  
此まにあどハ汝ひよ玉ハひ  
をむ

外結之三條

顯結此部證歌

の證をとりて物をうごがふあり  
故に大り二所にてきるものあり  
ますらの云おときありきたつ  
ら一ものごとく一ツの口  
決あり上たれた下たら  
上のきれ所にさされどいふ  
詞をうてこるべし上にら  
きれよるにいら  
一此下にいりよとあらばとりか  
詞をうてこるべし首のこころ  
明らうにきこゆかこたひ恐ろ

さ  
矢以さとす ぎむころら  
うらさある心さまねーひさうこれ  
天は志くれのなるらふみれば○我  
ころもか多みよま多志きうあは  
ままくらさらずはきてさねま勢○  
さひのくまひれみま川の湍ををや  
み君あてとらバよせいむむうも○  
ぎよ更てほり江るぐある松浦舟か  
ぢれと高しみを早いかも○あめは  
はなるふありまきぎこさごみみか

むきく  
むきくせむ  
とかして期すこ  
はつくははつか  
ありありあり  
つくよみをとこ  
ハ月中にある人  
こつくよとの神  
をさすに非を  
こり唐國の諺に  
月の中に桂樹あ  
り其高さ三千丈  
其下に壯士あり  
といふによりて  
よめるあり  
まひり賂あるこ  
と上にいへり  
いぢよつぎこそ  
ハ五百夜繼てあ  
れと願ふあり  
木ぬれあすまふ  
むきくびり木は

みて吹うつるいぶきれきたりよあ  
りほせるのみ  
ま 間以さとす ほときころら  
朝日てる嶼はさかどよあささ  
人おともせねばまうらかあーも○  
我いぢちーまさたぐあらバ亦もみ  
むあがは天津よよまら白浪○内日  
さそみやふゆくことをほがあーみ留  
れむらるーやればまべなー○ほ玉  
附をちれ管をら我うらず人はから  
はくをーまきぎのうら○豊國のまきく

稍は住まふ難ありよく宿鳥をとるものとり其形猫み似てかいほり此如く翼ありといへり  
 外結ハ一音の助辞あり其内上につくと中おつくと下につくと此別ふて三くさあるなり  
 さ此助音ハ名も詞にもつくあり名の上此ハ大か。小。狭。おどの意あり詞此上につく。つよくをむ。く。ろ。にて。い。よ。く。ま。す。く。あ。どの。く。ろ。く。またま。り。も。て。ま。

此濱べのまなごぢは海なちふーあらバなふうなげかむ  
 み 實 以 さとす そなつろろろ  
 みそらゆく月はひよりみあぶ一め  
 阿ひみー人のひえみーみゆる○ひ  
 さうさ此天つと空よとれる日れう  
 せなむ日こそ我らひやま免○み狩  
 まら狩バれをぬのならしをれなれ  
 ハ増らむこひこそまされ○ころろ  
 日此なかくーあれバニ園生れから  
 あるの花れ色よ出ぬべー○足玉も

つるありよせいむハ彼の人と事ありと世此人思よりていひとてむとくかぢのとつるといふ舟具此音あり今枕といふものとい異ありは。これハ名と詞此上おつとあり名の上此ハ具足したるにつき詞の上此ハ全きことろありらもたど。ま。こ。と。に。と。いふ意おつけてありこれ其別ありおわーく。鬱。悒の字あさまりまたあつとハをとかる冠詞あり

手玉もゆらみ織をを君がみけー  
 縫あへむあも  
 以 膽 以 さとす まらみづる意  
 豊國れかちろハ日ぎへひものこよ  
 以 つろりをれをかりるを日だへ○  
 以 ゆたあひの阪れふもとみきたを  
 ろる櫻れ花をみせむともあも○天  
 の河あなをー日あせたなをされ  
 渡さむよあなりー日あせ○山れべ  
 以 ゆくさつをハ多かれど山よも  
 野ももさをーあなくも○さくらを

眞洲美不鏡 下巻 共 五種不金藏

此うさの我おもふ女を人のよとせむことをくろくおもふとへうごあり豊くにのまあむぢ迄いまあ布といをむ序ありみハ名の上お此みつかり詞の上につくことか一然るを先哲ほとさのミ異あるとかといへるい深く思もさう一あやまりありみかりをる云ふら一がゆてい馴トいのむ序なりから一をハ楯紫なり

此をふの下草露一あれバあありて  
以ゆけ母ハあるとも  
を 小ハささす むまぶらら  
志のれあまハめ刈塩焼以とまあ  
ら一げのを櫛とりもみあくふ○き  
べ人れまがらふまほみ綿さハよ  
りなま一もれ妹ガをどこに○君さ  
あるみこの海れ濱まよみをゆき  
かへらむみれどあうぬかも○立と  
ほりみそを渡らむ丹葉ハ雨とある  
とも水ハ増らド○さひくハ下み

け。此字を脱せり補べ。ハ月日のへゆくをさしてゆかこさきど本居翁のたへ。此約といふいあやまりありからあハ紅藍花ありもゆらハ玉のうごきてあるなりみけ一ハ御着ぬひあ一むハぬひて間よあをむうありいハ詞の上おのミつきて名の上につくとあ一をたへハさういへありをるハ繁くさきて枝のくさむ

を思へ紫れ根摺の衣色よ出なゆ免  
くれわかひらつ二ッハあるゾ  
定結ハ部證詩  
を 葉ハさとき さ一みるらら  
むきこのれ天ゆく月を網よさ一我  
大きみハきぬ笠よせり○はヤ人れ  
さつまれせとを雲居あを速くも我  
ハけふみつるうも○うハべあきも  
れらも人ハあかをあり速き家路を  
うへに思へバ○松浦川七瀬れよど  
ハよどむとも我ハよどまに君を

さまざまあり  
 さつをハ狩人あ  
 り此詩こひのこ  
 とへうたあり  
 をふハ麻園之  
 あかしてハ夜あ  
 りてあり  
 名おも詞の  
 上にもつくるあ  
 り名此上のり小  
 此を詞此上の  
 の意を引いさす  
 あり  
 泊たらあすまハ  
 班食をりつきく  
 の夜此も此あり  
 綿さりにまでハ  
 いうあまーとい  
 ちむ序あり  
 をゆかむハを日  
 くらむをあらむ  
 あどむをよかつ

またむ○はろくよ思わゆる哉白雲  
 此ちへよ棚びくつくー此國ハ  
 も 藻以さとを あつむるころ  
 以も 我も一つあるおも三河なる  
 ろみ此路ゆ別きか縁つる○は  
 きやー榮えー君が以まーせバ昨日  
 も今日も我を召さまーを○赤駒此  
 越るうはせ此志免結ー妹が心ハ疑  
 念もなー○あひみてハ月もへなく  
 よあふと以ををそろと我を思わ  
 さむるも○人もなき國もあらぬあ

くるあり上の句  
 の下よりつくへ  
 ららす  
 あゆめハ必志か  
 きるとありれと  
 いまーむるあり  
 顯結のうちにた  
 も入べくみゆま  
 どてより轉り  
 るも多して混  
 ひやをー故に口  
 授面命すべー  
 は俗のあれがこ  
 まだ此の意ふ  
 あるもれ多し  
 ひさかた此詩お  
 もーらきいとひ  
 うーあり  
 ういづなきハ  
 いきあるといを  
 むが如し此なき  
 をかろくへた

吾妹子とるづさひ行てたぐひて居  
 らむ  
 よ 世以さとを よびむつふ意  
 天地の神も助よ草枕旅ゆく君が家  
 よ到るまで○あら玉此年のへゆけ  
 バ今ーハとゆめよ我せこ我名けら  
 まな○戀ーくハ形見よせよと我せ  
 こが植ー秋萩花さたよけり○今ハ  
 あハ死むよ我妹あハむして思ひ度  
 れを安けくもなー○常かくーらふ  
 れバ苦ー志はらくも心やをめむこ

るにて今も大吏  
あるといふべき  
所お大吏あは  
いひ其外もあり  
てろく今のも  
るくあり  
紀の哥おもろく  
にことなきこゆ  
る志まのやぶつ  
らとあり  
もハ必物をかぬ  
るあり則筆も持  
てこといへば必  
硯う墨うをとり  
にやるとあるき  
う如し此もと幽  
結のもとまがひ  
やすき詞多し心  
して見べし則源  
氏物語桐壺の巻  
の詞に鈴虫此聲  
此限を盡して

長き夜あぐずふ  
る泪あり此れい  
くくのよへあら  
く幽結のあり  
らませハ馬柵ふ  
り馬をせく木こ  
をろろハうそふ  
て偽ありうろを  
をろといへるハ  
同一万葉集に鴉  
とふ大をろ鳥の  
まさでよもきま  
さぬ君をころく  
とろあくともあ  
り  
よハよふありよ  
ぶといふ詞もも  
といよ此等ハぶ  
といハ活音をそ  
へろろあり別に  
しくべし  
ゆめハ上にとく

とばかりせよ  
な 名以さとき おろむる意  
以ふこと此かーとき國ぞくれなる  
此色よな出を思ひ志ぬとも○青山  
を横きも雲此灼然と忍まして  
人よ志らゆな○壯士此ゆくともみ  
ちそおろろあふ思ひてゆくな壯士  
此とも○我舟ハおきゆなさかりむ  
かへ舟かあまらかてら浦ゆこ記あ  
ハむ○我せこハ物な思ひそ事ーあ  
らバ火も水あも我なけあくふ

て 手以さとき はあらす意  
獨寐て絶もーひもをゆーみとせ  
むまべ志らふ縁此こぞなく○日  
あもろろ三阿ひよとれる糸もちて  
附てまーも此今ぞくやーき○待ち  
山夕越行て以布崎此墨田川原は獨  
かも寐む○神風此以せの濱萩折伏  
て旅寐やまらむ荒き濱べふ○以危  
此あひハ苦ーかりけはおどろきて  
か記探れともてよも觸ねむ  
に 荷以さとき もれよつくる意

か如し  
ありハ我ハあり  
我をあとといふハ  
いよ一へのつひ  
あり  
老まらくハあ  
らくあり息つく  
間のらるより轉  
トららなり  
あハ禁止のら  
あり則勿此字あ  
とれり  
いふことのか  
こたはにハ人の  
ものいひさがあ  
きくにふとあり  
かしこきハ今の  
おそろしきあり  
灼然ハいとどろ  
くあり  
まま一てハ笑ま  
して

おやろりハおろ  
そくにといをむ  
り如し  
かたまちかてら  
ハ方待がてら  
さかりハ遠ざか  
りあり  
あけあくにハあ  
うらなくお。あて  
必あらむぞあり  
てハ此ことをあ  
してかのことハ  
うつるあり  
獨ねてハ古昔男  
女亦あふまでの  
ちりひにとて下  
の袴此紐をか  
くむまひとらあ  
り其ひもをとか  
トとのためあり  
まつち山い布崎  
とりに紀の國あ

磯の上よ生るあしびを多をらめど  
みまべきたそが在とひをなくふ  
むさびびハらぬま覓むと足びき此  
山此さらをよあひよけらるも  
はやぶら神此社よ右かけしぬさハ  
多ぶらむ妹よあはなくに○ひせ此  
海の磯もどろふよまら浪かこ  
き人よ戀度る哉○きみふより言此  
繁を古郷の飛鳥此川よみそきふ  
ゆく  
緒以ささす 此れをむまぶ意

ふまをまちをひたて此山よ妹を置いて  
山ぢをゆけバひけりともなう  
おハしき人此まねてしききたん此  
我ままくらをほく人あら免や○ゆ  
く舟をありとみうまひのづか  
らちく有けむまらさよひ免  
嶼傳ひみぬ免の崎をまぎまめハヤ  
まと戀しく多らさハよなく○遠つ  
人松浦の川よわかゆ釣ひもあも  
とを我らそまう免  
や 矢以ささす なのあある意

眞洲美不鏡 下巻 三十一 珠積不金藏

り今武藏の國ハ  
あるのいいつを  
りあり  
いめれあひき此  
譚ハ遊仙窟の詞  
をとりてよめる  
ありゆめに十娘  
をみおどろきさ  
めてこれをさぐ  
れど手にあるハ  
ことおとあり  
にハ大蛇あるも  
のに小蛇あるも  
此をつくるら  
あり則山ハある  
木木にのる鳥と  
いふり如  
あーびハ馬酔木  
花あり  
むさくびハまを  
にいり  
ぬさのいづらむ

我命全けむ限り忘れめや  
けふハ思ひ増とも  
よゆた今や妹がた免我を  
もあーつる鮎  
みせむと焼ぢち此へつかふこと  
ハよけてやわだこ  
ながくありぬ此頃ハ  
やぶらー我妹  
やもがこれごらハうけひてぬれ  
ど免よみえこぬ  
は 笑以ささす のづづくる意

ハ妹おあひせ  
まへとてあてま  
つれるぬさある  
を其志るもあ  
らぬバ今を吾ハ  
其ぬさをうへ  
とまへとあり  
みそぎにい万の  
罪とがもきゆる  
ふれバうたあを  
いひささがるを  
もころきしてこ  
らいむとあり  
をみ緒のよとへ  
事ことおよくあ  
ふれり味ふべ  
ふをまちをハひ  
きてといをむ冠  
辞あり  
またてハハゆ  
らにせしあり  
とぐにかねハと

けひの海にをよくあら  
此乱れ出るみゆらま  
して物こひしきよ山本  
ぼ舟おきよこぐ見ゆ  
天のさぐ免おを舟は  
ハあせよけらも  
りえれ蓮花ハちす身  
きろも  
み保の浦乃ゆたけき  
ひもな  
と 戸以ささす ささめめめめ意



めかふとおおど  
あり  
こわきいこひ  
しきの古言あり  
紀よ君がめのこと  
わきりらふを  
てゝゐてかくや  
こひむもきこが  
めをありとあり  
まきとむハこぎ  
まをるあり  
日かゆハ若鮎こ  
やに二くさあり  
名と名のあひど  
と名と詞にあひ  
どにあるとあり  
名と名の間北ハ  
さもふもいひ重  
ぬるあり則さら  
しあやおを捨山  
あふこのやか  
みの山これあり

かぐ山と耳梨山とあひし時立てみ  
よきしつちとくにむら○人あがす  
あらくも志るしかづきまをしと  
たろべと舟北上よまむ○よろひら  
とつふよきまらすわがころる心ハ  
けだしつつよえまや○うちなび  
くもろ北柳と我やど北梅乃花とを  
つのおらわらむ○我妹子ふ吾らひ  
ゆけバともしくも並びをるあも  
むとせ北山  
か 彼以ささす うあがふころる

名と詞の間のハ  
則うたがひと  
すあり  
君やこむ我や行  
むこれらありさ  
れとことのもと  
ハ一ツあり  
もふしつう鮎ハ  
藻ふふを一握が  
かりの鮎こ  
魚つりかハハつ  
きあふよてハつ  
らふと同トこ  
のハつけ北ふら  
あり則やまとの  
くにのかしから  
のひとり北みよ  
のときあどい  
くつもつらぬる  
あり  
にハ海面こ  
あこのそが舟ハ

多けバぬれたろ福バながきひもが  
髪此頃みぬよかたれつらむる○苦  
しくも零るる雨うみまが崎さぬ北  
渡りよしへもあらなくふ○我せこ  
ハつづく行らむ沖つもれなむり北  
山をけふる越らむ○つづくよる舟  
ハてまらむあきの崎とだたみゆき  
し多なるしを舟○つへよゆきて  
あみう吾せむ枕つくつまやさぶ  
く思むゆべしも  
つ 津以ささす なるらぶころる

赤土をぬきる舟あり  
あまのさぐめハ  
あめこりひこの  
つうひめこ  
あせハ浅くおれ  
るあり  
ともしたハうら  
やまーきありこ  
のうとハ古事記  
のあり花をちを  
まてハさかりと  
いなむ序あり  
とハ二くさあり  
一くさいよると  
ひるおどのあり  
一くさい行むと  
おもつどあどの  
ありされどもと  
ハ一つあり  
あかづハ小鴨の  
一くさありと

よそふみー檀れをかもきみませバ  
とらつ御門とやれるーよゆく○お  
きつなとへあみ多つとも我せこあ  
み舟れ泊り浪たろ免やも○住れえ  
のまーれ松をら遠つ神わが大きみ  
れつでまー所○こきつ風ふくべく  
なりぬかーひ瀉汐ひれ浦よ玉藻か  
りてな○沖つ嶋ありその玉藻汐干  
ほ心かくろひない思をえむおも  
志 息心ささす つよむるころ  
葦べゆく鴨れ羽がひよ霜ふりてさ

ぶかもといふも  
のあり  
さきあらず。か  
ちをあらをあり  
けどーハあまよ  
いへり  
いも山と背山ハ  
あらひてあるや  
まあり  
かハきをめてう  
とがふこ  
たけがぬまハか  
をくろくくるま  
きにをれがつる  
つるとおつるこ  
苦しくも定家  
の卿がさの渡  
り北ゆき北たく  
れのうさこの  
うさよりとねら  
あり  
おきつもハ沖の

むき夕べのやまとし思わゆ○磐門  
にら多ぢからもがもたよわきをみ  
なふーあれがまべれあらなく○時  
ハしもいつもあらむをころろハあ  
くハあー日まもかろくごをおきて  
○なにハ瀉汐ひのあがり飽までみ  
人れみろこを我ーともーも○我思  
ひ人みあらせや玉くーげひらきあ  
けつとハ免みーみえら  
ゆ 湯以ささす まろろろく意  
あーきるれぬぢられ浦ゆ舟出して

眞洲美不鏡 下の巻 三三 珠和合巻

藻にて汐にのく  
るゝもの故あ  
りとかゝる冠辞  
あり  
たあ、一を舟ハ  
平舟にてやくち  
のふた舟あり  
枕つくハ枕をつ  
くるねやをさす  
あり  
つハ此と布似  
かよひより沖つ  
鳥沖の鳥あどに  
てあるべ  
速つ神ハ天皇を  
さしたてまつる  
ふり人よりい  
るかみ速き神  
てまゝすとい  
ふ義ありげま  
さることあり  
いでまゝ所ハ天

皇のをりをりい  
でまゝとこころを  
さしていふあり  
則みゆき所今  
此行幸宮とわい  
同トあり  
志ハ俗マガサと  
いふべきこと  
助音ありと  
そへたりとい  
ハあやまりあり  
とちからの手の  
力あり  
こくご若子なり  
児ある妻の身ま  
りれるをかあ  
むあり  
あにかさきあ  
こりまぞいあ  
まてみるとい  
むとめあり

みまに行む浪立あゆ免○たどれ  
浦ゆ打出てえれをまゝろよぞふ  
此高福よ雪ハふりける○浪速の浦  
ゆそがひよみゆる澳つ嶼こぎたむ  
舟ハ初せまらしも○朝よけみま  
く欲まら其玉を以あよしてかも手  
ゆかれさらむ○志きあへ枕ゆ  
る泪みぞう紀をしけるこひれ  
あけきふ  
へ 舳以ささす かあたへゆく意  
さくら田へたづなき渡る鮎ちがぬ

汐干よけらしたつなきわさる○や  
ほと路へ君がまつ日此近づけバ野  
よまつ塵もとよみてぞなく○あ  
たよいうなびふあきり夕されバ  
やまとへ越る雁ともしも○我や  
ぞよ鳴りかりが雲の上よこよひ  
なくあり國へかもゆく○みやこべ  
へ君ハ逝しを誰とける我下紐<sup>ひもの</sup>結  
手あゆも  
バ 葉散以ささす かこよお  
よがまらるる

人に志うせや  
人お志られつら  
むあり  
ゆお従の字もあ  
これ、どよりと  
ハ一きを異ある  
意ありそハ一う  
とふゆとよりと  
をよめるもあれ  
ばよくはかまべ  
きなり則人まろ  
のみ  
あまざかるひあ  
のあがぢゆこひ  
くればあふしの  
とよりやまとあ  
ま見ゆこれらこ  
そがひハ背面こ  
けおのけハ異も  
あまきるありさ  
れど日のあ、ろ  
あろべー

どぶ鳥はあまの此里をおきて  
むきみおあつりハこえげかも  
む○あふみれと夕沼ちどりな  
けバ心も志ぬよハあへ思わゆ○  
大皇は遠のみあどや何りがよ  
はとをくれバ神代し思わゆ○  
やとまたろ松の木なをみれバ昔  
此人をあひみろごとく○あう  
のかはられちどりながあけバ我  
さ保川は思わゆるくみ  
戸閉以さとす とうはらず

くがるハもろ  
あり古ハもろこ  
とをく、といへ  
り則にたなま  
とよりくたし神  
ありとあり  
へとにをあま  
ることつねに多  
しハ地のこあ  
たありかなこへ  
うつろくろの  
助音ありにハ物  
おつくくろあ  
まむなるかハ異  
あるけぢめ  
らあびハ海之方  
あり  
くよハかもゆく  
ハふるさとへう  
へるあらむらあ  
り古も今も我古  
さとをばくと

かくるころろ  
二人ゆけどゆき過がき秋山を以  
うでう君が獨越なむ○こくはぬ  
浦の濱ゆふもへあま心ハもへど  
たがよあハぬおも○むしふすはあ  
ごやろ志あみふたれど妹よーね  
ねバ肌しさむしも○皆人をねよと  
は鐘ハ打なれど君をしもへバハ  
かてぬおも○ハへおしてみれどあ  
うねを草枕旅ももつはとあろがと  
もーさ

真洲美不鏡 一の巻 五種不舎藏

つひあり  
下ひもの自らと  
くるをばこひ  
き入おあふ前兆  
とせり  
バハとせバカ  
らむ。かくせバ。と  
あらむと思ひま  
うくることあり  
志ぬにハ志こと  
わるむかて情の  
つよまるあり  
と布のミかどハ  
國司此政府をさ  
しそいふ  
ふをみればハ汝  
をこれバあり  
どハせしことの  
かひなく立かへ  
るらくろあり  
みくゆぬきま  
ゆふまでハハ

ぞ 衣強以ささす うちささす意  
おくらうバ今ハまのうらむ子あくら  
む其かの母もわを待らむぞ○一日  
おハちくなみーきよ思へどもなぞ  
其珠にておほきかゝれ○えどりこ  
れをひぬもとほり朝夕よ音のぞ  
吾あくたえあーふして○我天皇天  
志らさむと思ちぬバおちみぞみけ  
るわつらの杣山○あーびきの磐ねこ  
びーみ管けをひあバかさみとー  
色乃みぞゆふ

つといもむ序こ  
むいふすまあご  
やハあさたうあ  
る夜のもれあり  
古事記にもむ  
ぶすまおごやが  
志に。とあり温  
氣和柔之内あり  
がてぬがもが  
きありいねかて  
ぬるかもあり  
たををしもハバ  
ハ君を思へバ  
ともささうら  
やまーさにて上  
おいへると同  
ずハーかごぞと  
人にゆひきとす  
おくらハ山上憶  
良あり此う憶  
良自らあめるこ  
あうらハかづる

が 彼呼以ささす ○ゆびささす意  
くらあゝぢやゝほとちきをぬバ  
るまは夜度る月よきをひあくむあ  
も○いせの海は澳つ白浪玉よも  
つゝみて妹がゆつとふせむ○あ  
をよよーなられとやこハ咲花は白  
ふが如く今さありあや○筑紫舟以  
まふもこねバあらかどめ荒ぶるま  
みをみるがかあーさ○我せこがけ  
るまぬ薄ーさわ風ハゆぬくあ吹そ  
ゆくよゆぬらまで



助音あり其類い  
とくすくあし  
もハ俗のマアと  
りかおあたまり  
此マア。いやがて  
も。此よこあまれ  
るあり  
うらさびてハあ  
ふこ大つのみや  
こさかりあり  
も天武此御代に  
あれてたり此  
あまててらるハ  
近江の地神の御  
あらびによりて  
阿まよりといふ  
くらんこ  
まがつのこらが  
あありちハおや  
つの子といか女  
を水葬せし時よ  
めるにて其女の

きそ山跡よりこひ来し心まじあ  
かなくふ  
な 菜以さすす やららぐらこころ  
うるの花それともみえず零雪は  
ちしろけむあまらかひやらバ○お  
た免もよあふられおきめあまより  
ハ山隠りてみえまらもあらむ○  
衣手此別お今夜ゆ妹も我もひく  
戀むなあふよしをあこ○上つけぬ  
よぐハ島どは朝日さしま記らハ  
もなありつ？みれば○あまよりハ

かつりくごゆる  
ミちといふこころ  
あり  
そハ一音をほあ  
ちいふことあし  
必上にあといふ  
音をおくあり則  
こまおきかせそ  
あどのごとし  
かけてハ詞にか  
けてあり  
たがハ正所こ  
志たおけりハ下  
にきとりあり  
さらきの珠ハ五  
月の薬玉とてあ  
り  
ぬハ貫あり  
かぢひくハろと  
いふものをおそ  
あり此も此おし  
てひくものこ

我ハこひむなあちり山以をみあ  
らし君が越以なバ  
急 餌以さすす まのほらこころ  
山はをふあちむら騒ぎゆくなれと  
我ハさぶし急君よしあらむバ○あ  
らち福此母よあらえま我もてら心  
ハよし急きみかまたくハ○あらそく  
を神もほくまねよし急やよそふ  
る君がみくからなくふ○上野さぬ  
のく立とりハやし我ハ待む急こ  
としこぞとも○たまちをふ神も我

あハ今俗のナア  
といふにあされ  
りナア。則此の  
のよこあまれる  
あり  
いちどろけむハ  
いちちろからむ  
あり灼然あり  
ほつあひハとた  
つうひあり間使  
の義あり  
たきめもよ此う  
と。も此證をあや  
まりてこまよ  
たせりけつるべ  
し  
ほぐの島ハ上  
野の國の地名  
まきらハハ目  
霧ハハあり今  
ふと同ド  
かあのかもら

をハうつてこそあ急や命れをけ  
くもあ  
息ひさすす ちけきよめ意  
いあといど語れくとせらせこそ  
しひをまをせ志ひごとくはる○  
言まよくむもなりひそ一日ふよ  
君いあういむむむむとらも○我  
せこがあとふもむあおひゆあバ  
紀の關守いさめてむあも○あり  
ち瀉ありなぐさえてゆあめども  
へある妹いああーみせむ○みら

と同日あきど後  
世のとあり古  
かもとれとい  
り  
あハ古昔の  
り中ころあり  
あきあり  
あぢハかものた  
いひありむら  
多くむれあも  
のあれいあり  
あらちハ足乳  
の親此ころあり  
よそふるハ人の  
いひをやすあり  
くくちハ莖立  
あハ蕪菜の莖  
あはちまハハ靈  
幸ふにてきたま  
さきまハまを神  
といハあり  
うつてハ打すて

くくあれらぐぶつひ  
いもちうちてーやはむ  
を 尾ハさす なびくる意  
我せこーとげむといまが人言ハ繁  
くつりとも出てあいまーを○うぢ  
川を舟でせをとよバハくもさあ  
えざれらーかぢれともさぬ○霰ふ  
るかーまれ埼を浪高み過てやゆあ  
むらひーまもれを○ありそこを浪  
いあーこーあのもがようみれ玉も  
けろくハあらぬを○やくもあつ



あり  
 以これ中ころ  
 へさえてあり  
 こときよくハ  
 さぎよくいひき  
 るあり  
 いさづきハ心勞  
 あり  
 いぶかハハひき  
 ふりにてあり  
 一とあげくあり  
 こつハ稜威  
 タ々あり  
 くぶつハ頭槌  
 にて神代の武器  
 ありハハハハハ  
 石槌にて同一と  
 あり  
 をハ俗のヨと似たり  
 ける冠辞ありあれ  
 うーあがら亦さす  
 かきハ弥重墻あり

いづもやへがきつはらみよやくが  
 きつらそれやくがきを

此外もありぬべし

まぐて此證詩どもハ思ひいづら  
 よああがひ本書をも見くらぐ祿  
 ハ一つ二つはあやほりハ阿らむ  
 かーそハみむ人あらたえてよ

真洲美乃鏡下之卷終

あられうりハかしまとか  
 志うすぐにハあ  
 つまごこハ婦籠あり  
 やへ

明治十九年十月二日版權免許  
 同年十二月 出版發兌

定價金壹圓五拾錢

著者 故人 鍋島市郎

元水澤縣平民

山形縣平民 陸前國玉造郡元第七  
 大區二小區岩出山村

版主 鈴木昌玄

神田區鍛冶町三番地  
 寄留

製本發兌人 石塚徳次郎

東京府平民 麴町區麴町三丁目  
 十九番地

東京諸國賣捌所

<small>東京 日本橋通二丁目</small>	北畠茂兵衛	<small>京都 上京區御幸町</small>	藤井孫兵衛
<small>同 全通三丁目</small>	稻田佐兵衛	<small>大坂 北久太郎町</small>	柳原喜兵衛
<small>同 全通四丁目</small>	須原屋佐助	<small>同 南久室寺町</small>	前川善兵衛
<small>同 南傳馬町二丁目</small>	吉川半七	<small>名古屋 玉屋町</small>	片野東四郎
<small>同 淺草東仲町</small>	淺倉久兵衛	<small>美濃 大垣岐阜町</small>	岡安慶介
<small>京都 三條寺町</small>	福井源太郎	<small>熊本縣 熊本新三丁目</small>	長崎次郎

鍋島誠大人著

皇國學言靈解義

門人小山田文雄輯錄

鍋島誠大人詠歌集

近刻

